

鳥人間 コンテストに参加して〈2〉

東京理科大学理工学部 - Aircraft Makers

平成26年度代表 佐々木 峻



ACMこれまでの歩み

2002年4月、Aircraft Makers（以下ACM）は当時の理工学部機械科数名の有志により、人力飛行機による鳥人間コンテスト出場及び記録更新を目的として発足した学生組織です。拠点を千葉県野田市にある野田キャンパスに置き、航空部が保有している格納庫をお借りして日々活動しています。

発足当時、活動場所さえままならない中で制作に取り組んだ1号機は、完成に漕ぎ着けるまでに3年を要しましたが、浮上に至ることはありませんでした。それ以来7機の実機製作を行い、鳥人間コンテストには2007年、2008年、2011年と出場機会を得るも参加賞止まりの結果しか残すことができなかったことを背景に、技術の抜本的な解決が求められた昨年度代は飛行機の原点に立ち返ることを年間の目標として決定し、鳥人間コンテストありきの年間スケジュールをやめ、1年間“飛ばず”ことだけに尽力しました。

昨年度の機体8号機「彩雲」は静岡県富士川市にある富士川飛行場において、2011年鳥人間コンテストで記録した42mを見事に凌駕する400m飛行に成功しました。初出場の交流飛行会で優勝するものの、浮上で歓喜の酒を交わした氷河期を超え、空を捉えた今のACMに400m飛行で笑顔が生まれることはありませんでした。

10年越し

我々は飛べる集団へと生まれ変わり、発足当時の目的を果たすため今年度の高速機体9号機「雨燕」を制作しました。設計コンセプトを「今のACMが勝ちいける機体」とし過去の大会での入賞タイムや技術的実現の可能性を考え目標を掲げ、アドバンテージを意識した上で戦略を構築しました。この高い視座によるゲシュタルトビューの確保が、1年間の最終地点を見据え続けるのに大きく貢献したことは言うまでもないことです。

1月～4月にかけて連日連夜行われる作業、休日ともなると作業場は朝から晩までフル活動を余儀なくされます。冷暖房設備に乏しい作業場で悴んだ手に気合いを投入しながら、身を粉にする想いで完成させた機体。完成と同時に湧いた「緊張」という感情が、差し迫った大一番へ道のりが見えた瞬間でもありました。

6月末、飛行場で可能な限りの調整を終えた頃には滑走路長の制限がチーム記録を伸ばせる制限になっていました。ACM始まって以来の快挙の連続に、祝してくれるOBの皆様に感謝しつつも、あくまで冷静に振る舞う現役からは目標を見失わず一喜一憂しない姿勢が窺えました。一日一日コンテスト足音が大きくなると同時に、沸々と士気が上がっていきました。





本番

夏の琵琶湖が銀紙を貼り付けたように鈍く、眼底までくらませるような強い光でプラットホームが湖上に濃い影を落とします。張り詰めた空気を漂わせる聖地を前に不思議と緊張はなく、不安が期待を煽り、鼓動を高まらせ今か今かと待ちわびながら時間は過ぎましたが、誘導路そしてプラットホームを歩む頃には誰からの足取りにも不安を感じることはありませんでした。

ACMの下馬評は低く、テレビ局側の態度からも期待されていないのは一目瞭然でした。機載カメラは6チームの中で唯一我々だけが搭載されず、インタビューもありませんでした。今となってはプレッシャーを与えずフライトだけに集中させてくれたテレビ局には感謝しなければなりません。

「Gate Open!」その言葉を聞いてからの数分間、正直あまり記憶がありません。額から頬にかけて流れる汗が湖風に触れて気化し体温を奪う感覚と高揚による震えが共鳴する感覚だけが残っています。後で動画を見返すと息も瞬きもすることなく、必死に大声で応援している自分と仲間の姿がありました。パイロットの呼吸が伝わってくるほど集中し、数秒ごとに一喜一憂した湖上の思い出を忘れる日は来ないのでしょうか。

運・経験・技術すべてを兼ね備えた者だけが頂きに立てる鳥人間コンテストにおいて、我々の持ち出した自信が自惚れだったことに気付かせられるのはそう難しい話ではありませんでした。無事にプラットホームから発進後、定常飛行に入り

500m先にある旋回地点までは順調に到達しました。旋回開始のベルが鳴り、飛行場では練習することができない最大関門を向え一気に緊張が高まります。旋回の入りは上々で旋回半径もフライト計画通り進んでいましたが、経験と技術の未熟さを思い知らされるように高度は落ちていきました。切った舵を戻すタイミングと機体の高度を知る術を持っていなかったのです。旋回を完了した時にはすでに1~2mまで高度は落ち、回復し直し直すことはもはや不可能でした。

落水した瞬間、時間がピタッと止まったように感じました。しかし、針は止まることなく進んでいることに気付いたのは後輩たちの顔を見た時です。入学して間もない1年生すら悔し涙を流し、目の奥は次への野望に燃えていたのです。過去10年の歴史を尊重し築いた今年度の活動が、今後さらなる発展を志向する「常翔ACM」の礎になれたことを確信した瞬間でもありました。

人力プロペラ機タイムトライアル部門 第3位。初の表彰台を手にし、今回の鳥人間コンテストを終えました。発足当時の目的を果たせなかったものの、「勝つ」という目標は図らずも達成しました。

大きな物事を成すときは、『技術・資金・関心』の三つが揃うことが条件だといえます。今こうして我々の活動に関して執筆でき、読んでいただいている皆さんの目に触れたこともまた、我々の大きな原動力になり得るのです。今回の機会をいただけた理窓会の方々と、拙い文章を最後まで読んでいただいた読者の皆様に対する感謝の言葉で終わりたいと思います。ありがとうございました。



中央が佐々木峻君